

市民とパブリックスペースの系譜

まちの物語へ

白幡 洋三郎 *Written by Youzaburo Shirahata*

はじめに

子どもたちに「パブリックスペースってどこ？」と聞かれたらどう答えよう。ぱつと思いついたところと言うと、「君たちが朝、学校へ行く途中の通学路、とにかく通ってゆくところがすべてパブリックスペースだよ」「くらいだろうか。家の玄関を一步出た目の前の道路から学校まで、途中近道したり公園を横切ったり、そんな道のはすべてパブリックスペースである。こんなところが一番わかりやすい答えだろうと思う。日中のほどんどを過ごす学校も、やはりパブリックスペースと考えていい。

大人に向かつても、ほぼ同様の答えになるだろう。多くの勤め人が家を出て駅に行くまでの道のりは、皆パブリックスペースだ。電車を待つ駅もまたパブリックスペースと言えるであろう。つり革にぶら下がってギュウギュウ詰めに耐える電車の車内も同じと考えてよい。利用料金を払っているけれども誰もが利用し、共に使用するべき一定の規則や暗黙のルールがある。電車を降りて会社の玄関に入るまでは、皆パブリックスペースと言えるし、また会社の内部も完全ではないが、パブリックスペースの性格を備えた空間と言うべきではないだろうか。我が家を一步出た玄関先から再び我が家に戻るまで、不特定の複数の人間と共に利用する空間は、皆とりあえずはパブリックスペースと呼べるであろう。

しかし、この説明による日本人の「パブリック」が、道路や電車、学校や職場といったワーカーホリックな遊びや楽しみの乏しい空間イメージにつながるの気にかかる。

さて、日本には「天下の公道」という表現があった。人々

が往来する道は誰のものでもない「天下」のしかし誰もが使う「公道」とはお上のこと。「將軍様の」という「エンス」時代の「公」とはお上のこと。「將軍様の」という「エンス」があると考えられるがそんな「公」も含んでいたのが日本のパブリックだったと見るべきだろう。これなどは近代以前から存在したパブリックスペースをよく表現していると言えよう。そして、日本の近代以後を代表するパブリックスペース、近代的なパブリックスペースの幕開けを飾ったものとは言え、公園」ということになるだろう。まずは近代日本におけるパブリックスペースの代表とも言える公園の系譜を、ざっとたどっておきたい。

日本の公園、四つの画期

日本の公園の歴史は、大きく四期に分けられると私は思っている。

最初の画期は、一八七三年(明治六)の太政官布達である。これは、日本全土の土地所有について統一した考えを示そうとした中で、明治政府がこれまで制度的に整っていなかった「公園」の制定を宣言したもので、「ここに行政的都市公園の第一歩が始まる。

明治維新の時の公園づくりにははつきりした目標があった。利用する側にはなく、つくる側にはある。つくる側にあった明確な目標とは、先進国に追いつく、「という目標であり、そのために必要と思われる近代都市装置を創出することである。そして、その背後に「新時代になろう、新しい国民が誕生してほしい」という為政者の思いが色濃く存在

していた。

出身階層を異にする、いろいろな人々が出会い、ゆくり落ち着いて憩える場を公園の名の下につくろうとしていたのである。つまり言うてみれば、かつての四民「士農工商」の一番上と一番下、武家と町人が一緒になつて集うということだけでも江戸時代とは違う新鮮な体験の場であつただろう。したがって、明治から大正にかけての公園は、それなりに活況を呈していたと見て間違いない。

さらに公園は、時代の最先端を行く場所でもあつた。東京で言えば芝公園には紅葉館という有名な料亭ができた。上野公園には精養軒、日比谷公園には松本楼という具合である。日比谷公園は、よそにはない「フナキなどモダンな洋食が食べられる場所、ファッションナブルなところだつた。当時の公園は時間があつたらぜひ行ってみたいと思つ、日常生活とは違う体験ができる魅力的な場所であつた。

次の画期は、一九三三年(大正二二)の関東大震災である。「この後につくられた公園は、大都市を災害からどう守るか」という防災の目的意識がはつきりあらわれる。初期の「近代化公園」から「防災公園」への性格の転換が見られる。歴史や物語とは無関係に、生命を守る役割を果たそうという明確な目的を持っていた。

東京では、小学校の校庭を拡大して防災公園とした。学校の校庭は防災用途にも、また学校行事や地域の行事にも使えるようになっており、目的意識がはつきりした都市公園だつたと言える。

第三の画期は、一九四五年の敗戦とそれ以後の戦後復興期である。当時は皆が貧しく、楽しみも乏しかったため、青少年に健全な遊び場を与えたい」という思いが都市公園に求められていた。当時の公園の特徴と言えは、なんといってもキヤッチボール、現在、これを復活させようという気運もある(ができる場所であつた。幼児には砂場、滑り台、ブランコと

いう三種の神器を置いて、小学校高学年〜中学生向けにはキャッチボールのできるグラウンド風なものをつくる。とくに込み入った空間設計をするのではなく、行政が市民に空間を供与しただけ、ただ、それだけの空間と云うてよかった。

一方、まともな大人はみんな働いていて、「公園に行くよいうな大人は失業者」という雰囲気があった。つまり、都市公園の機能が非常に若年化し、青少年向けになっていたと思われる。

昭和三〇年代の歌謡曲に「若いお巡りさん」という曲がある。公園でデートしている二人連れにお巡りさんが、「近頃この辺りは物騒だから。話の続きは明日にして帰りなさい」と語りかける。公園というのは基本は子どもで大人がデートをするような場所ではない。夜遅くまで成人が二人で公園にいるのはおかしいから「帰りなさい」と言われる。元気な小・中学生のために機能を限定した運動場だったのが、この時期の都市公園の性格であつたろう。

第四の画期は、バブル期である。「この時期の公園は寂しい場所、人があまり行かない場所、場合によっては犯罪の温床になつた。なぜなら公園など行かなくても、おもしろい場所、刺激的な楽しい場所が他にいっぱいできたからである。ディースコも広まり、遊園地も充実する。女性の行ける居酒屋やバーもたくさんできた。

これより以前、戦後すぐの時代には、女性が居酒屋に行くのはもちろん、外食すること自体、はばかられる雰囲気があつた。一九七〇年代にファミリーレストランができて、お母さんは初めて子どもと一緒に外食できるようになつたと言つても過言ではなからう。主婦が外食する姿は、ほとんど想像できず、外食は働く男たちの独擅場だつた。特にサラリーマンのお父さん、男性勤労者の多くは翌日働く英気を養うために酒場に集う。中年のオジサンにとって居酒屋こそが「公園」だつたと私は思う。オジサンは自分

たちの「公園」があつたから公園なんかに行かなかつた。

バブル期になると、そういうオジサンだけでなく、かつては公園利用の中心だつた青少年も、そして子連れのお母さんも、各年齢層が遊べる場所が他にたくさんできて、たとえば家族連れで公園に行くなどという人たちが、ほとんどいなくなつてしまつた。

私が「公園なんかいらぬ」と『中央公論』に寄稿したのは、バブルの少し前のことである。公園には良い公園も悪い公園もあるがそれまでは全般的に言つてどこの公園もそれなりに活気があつて、「時間があれば行ってみようか」と思わせ、「それなりに納得できる」装置であつた。

ところがバブルの頃になると、公園はどつちもよそよそしくて、もっと他に魅力的な場所があるのに、わざわざ公費を使って整備する必要のあるのだろうか」という印象が強まってきたのである。他の場所より魅力のある装置を公園が提示できなくなつていったということである。こうして、その後の都市公園は、各所でフルテナント村になつていった。「公園、都市公園は今日国民に何を提供できるのか」という根本的な疑問がバブル期の頃に生まれたが、その答えはいまだに模索中というところである。

以上、第一期は約五〇年、第二期が二五年ほど、第三期が四〇年足らずで、今が第四期目。こういう風に分けて見つめると、公園の役割がどのように変遷したかがわかつてくるし、各時代に求められていた公園の機能が見えてくる。そしてさらに興味深いところだが、なにも、お役所が都市公園と指定した場所だけが公園ではないこともわかつてくるのである。

思い返せば戦後の子どもたちは、町はずれにある原っぱで走り回り、通りの隅に置かれた土管の中で遊んだ。これは行政が決めた公園ではなかつたが、子どもたちには楽しい公園だつた。勤め帰りのお父さんにとって、ガード下の居

酒屋、街角の赤提灯はにぎやかに笑い、愚痴をぶつけ合う公園だったし、ちよつと散財を覚悟で行くバーやスナックも公園だった。家を守るお母さんは、古くは井戸端が、あるいは家の前の通りや路地脇が公園だったし、おばあさんたちが通う病院の待合室も、友人の病状を尋ね、大いに愚痴をこぼすおしゃべりの公園であった。庶民にはいろいろな公園があったのである。公園が言いすぎであれば、それこそパブリックスペースと名付けるべき場所だった。

つくられる公共空間、

できあがる公共空間

日本は西洋に学んで公園をつくった。西洋より遅れて公園ができたと思われている。幕末・明治初年になってようやく先進西洋諸国の例にならない公園をつくり出した、というのが常識になっている。しかし、それまで日本には公園がなかったというのは間違いで、じつは日本には、西洋より二〇〇年ほど早く公園が存在していたというのが私の考えである。その代表例は江戸の花見園地で、享保年間、八代將軍吉宗の頃、江戸市域の周辺部に誕生した御殿山、飛鳥山、向島などの花見園地は、お上が準備し金を出し、誰もが楽しめるパブリックスペースを政策としてつくり出した計画的な公園の極めて早い例である。公園の先進国といわれる欧米に公園が誕生する一九世紀はじめの二〇〇年ほど前から、世界に先駆けてつくり出された公園であった。

しかし、これらは「つくり出された」と書いたように、まさに「お上があれこれ考え、お上の意図で、つくられた」パブリック



静かに鑑賞する高齢者のペアとにぎやかに酒盛りする茶髪の若者グループ。現在の飛鳥山花見

クスペースであった。吉宗が各所に数百あるいは一千にも及ぶ桜の苗木を用意し、植えさせて園地の形成を図ったものである。すなわち、つくられる公共空間である。お上がつくる、上から与えられた公共の場である。それは正確に言えば「官製」の場であり、「公共」の場とは言えないのではないが、

確かにそのような面はあるのだが、吉宗が桜の植樹などで園地形成を図ったのは、一方的な上からの計画ではなく、下からも求められ、望まれている施策がうまく汲み取られたものであった、とするのが実状をより正確にとらえた見方であろう。

江戸時代をさらにさかのぼれば、室町後期には、京都の周辺部では四季の風光を愛でる遊山の場所が生まれており、とくに花見の時期には遊客を集めていた。こつした、下からできあがる名所や遊山の地、「つくられる」のではなく「できあがる公共空間」が、後のパブリックスペースの核になっ



私庭園公開(英国)訪問客とお茶の接待

たことは間違いない。

そうした庶民の自発性、自然発生性が生かされた場所こそ本来の公共の場、楽しみを多くの人と分かち合う場と云ってよからた。そんな場所は、日本だけのものではなかった。

西洋の中世には町の中心に広場があつて、そこは市場であり、会話の場所であり、芝居小屋が並び、人生の喜びや楽しみいさかひや悲しみが生まれる生き生きとした空間であつた。そこはむしろ「つくられる」というよりは、できあがる「性格の方が著しかった。中世の都市広場の文化は近世には衰えていた印象がある。むしろ日本の封建権力の方が良好な公共空間をつくりだした印象が強い。

近代が近づくと西洋では、俄然新興の資産家たちがパブリックなものに目覚め始める。その伝統は「良き市民」の公共精神に広く受け継がれ、西洋市民社会なるものの充実をもたらすのである。そうした具体例は、今日にも引き継がれていることを強く感じたのは、たとえばイギリスで体験した市民による自宅の庭の開放であつた。

イギリスでは毎年、千数百カ所を越す城郭や庭園、歴史的邸宅や記念物などを紹介したガイドブックが新しい情報を加えて毎年発行される。その年の公開期間や入場可能時間帯、入場料金などがコンパクトに記載されている、便利なガイドブックである。

記載されている城や庭園などはナショナル・トラストなど資金面でも活動面でも、しっかりした団体にちゃんと運営管理されているものがほとんどで、公共財として多くの人々に楽しみを与えている。このガイドブックのタイトルには「Open to the Public」つまり「一般公開」の施設である旨の記載がある。

私がとくに感心したのは、これとは別に発行されるものと小さな冊子である。それは年間に三日とか一週間ほどしか開かないプライベートな庭園を集めたもので、たとえばある庭は、今年五月の十日から十二日まで「Open to the Public」であると記載がある。日本でなら「非公開」と書き

そんなほど限定された入場時期なのであるが、堂々と「一般公開」とは見上げたものだと思う。「プライベート」なパブリック・ガーデンである。そうした年間数日のパブリックスペースを私はいくつか訪れた。そしてどれも感心した。大きな庭ではない。日本の家屋敷の面積からいうとかなりの豪邸だが、イギリスの標準からは、そして英国庭園のつくりからは小さな屋敷の庭である。日本の感覚でいえば六〇〇円とか一〇〇〇円くらいの入場料が徴収される。その徴収の仕方はずっとも素人っぽい。それはそうだろう。年に一〜三日しか開かない庭園なのだから。そしてたいてい、その徴収台の辺りにお茶の接待の用意がある。

供されるのは手作りのクッキーやケーキである。出されるお茶は、むしろ紅茶。これを陶器のポットで注いでくれる。クッキーやケーキは舌の肥えた日本人には高級でもなく腕の良さも感じさせないが、何より雰囲気がいよいよ庭をめぐった後だと甘いお菓子はそれだけで美味である。それに接待役の人物(屋敷の主やその友人、ボランティアたち)が一人ひとりと言葉を交わしながらポットの紅茶をカップに注いでくれる。

英語での会話となると気が重い私も、先に庭を見て回す



将棋やトランプに熱中する人々、月壇公園。北京



氷結した池で親子がそり遊び、日壇公園。北京

て話題を用意しておき、何とか話を合わせる。ほとんどの庭が入場者であふれかえるほどには入らないから可能なのだから、ゆったりと会話が進む。花の咲き具合、手入れの秘訣、その他よもやま話……。

市販のお菓子に給茶器からのお茶を紙コップで、といった大量処理方式をイギリス人は採用しない。ポットが空になると悠然と奥に入って次を用意する。待たされる間、人々は庭の見物に向かったり、見終わった人は庭の感想を語り合ったりしている。

要するに社交の場なのである。庭を見るだけではないのである。会話を楽しみ、お茶やケーキを楽しむ。人と人が交わり、楽しく時を過ごす。わずか年間三日だけ、など問題ではない。プライベートながら、これらの庭は見事にしっかりとパブリックスペースの役割を果たしている。

コミュニティあつてのスペース

— 公共空間の楽しみ

現代日本人のイメージする公共性の要件を数え上げてみようとしたら、次のような項目が頭に浮かんだ。日本の公園や公会堂、公民館など、「公」の付く施設をもとにした要件である。

役所が責任を持つてつくる。

無料である。

利用者は奉仕・責任など負わない(設置者でないから利用すればいい)。

この項目を見ていると市民・住民を名乗る人々のわがままな利用が目につかんでくる。コミュニティにせひとも必要なスペース近隣住民が集まる公流の場の雰囲気は乏しい。その都度一過性の利用がなされる場所、皆の自由な活用の場合というより、各人のわがままな利用にじゅうりんされる空間の印象が抜けない。生き生きしたパブリックスペースの役割を果たしているイギリスの私庭園に比べ、「公」を名乗りながら、もつとはるかに身勝手な私的な空間が見える。まともなパブリックであるためには、従来の公共施設をここで掲げた三つの要件とは逆の視点で見つめる必要があるだろう。たとえば、施設の無料利用であるが、中国の公園は老若男女、各階層に広く利用され、よくにぎわっているが、これまでにほとんど有料だった。入園料を取って経営してきたのである。「公」を支えるはずの「無料」が公を形骸化させ、有料がむしろ公共性を元気にさせているのである。考えてみるべき課題であろう。

人々に愛され利用される広場や公園、街路などの公共空間はどうしたらつくれるだろうか。デザインの良いだけでは、公共空間が意味を持つのはコミュニティを元気づけ、生き生きと利用されてこそである。小説の舞台になつたり、絵画に描かれたり、大勢が集まって飲み食いしたり、イベントが行われたり、さまざまな催しと市民活動の歴史

が積み重なることで、広場や公園などパブリックスペースの厚みが増していく。しかも利用とは、若者に見られるような活気ある使い方はかりでなく、一見地味で目立たない利用であつても、それが人の心をしっかりとらえ、しみじみと満足の行く時間を与えてくれるものであれば、これに勝る利用はないであろう。

刹那的な快楽を与えてくれる装置ではなく、その場にまつわる種々の「物語」がいつも思い出され、しみじみと味わえるようなパブリックスペースは、息の長い永遠の憩いを与えてくれることだろう。

CEL

白幡 洋二郎(しろはた・ようじやう)

国際日本文化研究センター教授。一九四九年大阪府生まれ。京都大学農学部卒業後、西ドイツ・ハノーヴァー工科大学(当時)に留学。京都大学農学部助手、国際日本文化研究センター助教授をへて九六年より現職。専門分野は造園学・産業技術史。主な著書は、『大名庭園―江戸の饗宴』(講談社)、『旅行ノース―昭和が生んだ庶民の新生活』(中央公論社)、『近代都市公園史の研究―欧化の系譜』(思文閣出版)など。